

日中対照研究の可能性

鈴木 義昭

キーワード

日本語教育・日中対照研究・漢文訓読語

日本語教育を支える諸分野の中で、特に日中両国の日本語教育に関して言うと、両言語の対照研究は極めて重要な意味を持っていると考えられる。元来、他の外国語を学ぶという事は、自国の言語との無意識のうちの対照によって行われているものであろう。「私は学生です」という文を学んだ中国人日本語学習者は、「我是学生」を頭に浮かべるであろうし、「大象鼻子長」を見た日本人中国語学習者は、「象は鼻が長い」の文を思い浮かべるに違いない。まず、語順がほぼ同じであるし、使われている漢字もほぼ共通である。それに、機能的にも似た点がある。「象鼻長し」と古文で言ってみると、両国語は一段と近づいてくるわけである。

管見によれば、ここ二十年来の中国における日本語研究の多くは、日中対照研究に沿って行われてきたと言っても過言ではない。北京大学王順洪氏の論文（「二十年来中国的汉日語言対比研究」1993 架蔵版）を眺めてみると、中国の日本語学者たちは、中日対照言語学関係の論文を数多く書いている。王氏によれば、80年代から99年までに、250篇の日中対照研究関係の論文が書かれているそうである。早稲田大学大学院日本語教育研究科の筆者の研究室においても日中対照研究を主テーマとする学生が一期に3～4名（春・秋二期では、6～8名）ほどいる。また、筆者が1993年、北京日本学研究所において教鞭を執った時も、語学コースのほとんどの院生たちは日中対照研究を修士論文のテーマとして選んでいた。中国の日本語関係者が何故かくも膨大な日中対照研究を行うのかという点については、推測の域を出ないが、文革期の停滞（多くの教師は授業を担当せず、日本語通訳に当たっていた）からの離脱という時期に、日本で行われていた対照研究に近づき、それが広まって行ったものと思われる。漢字の共用から導き出される親近感と、前述したような文法的な類似に興味を持ったためであろう。

さて、日本においては、例えば、金若静『同じ漢字でも これだけ違う日本語と中国語』（学生社1988）の出版は、所謂「同文同種」というデマゴグを打ち破ったものとして我々の記憶に新しい。すなわち、敗戦前の日本は、中国の植民地支配の理論的根拠に「同文同種」の概念を用いていた。同じ文字を使っている国家同士であるからには、同じ民族である。よって、進んだ国日本が遅れた国中国を植民地にすることが許されるという論法であった。1970年代後期からの日中国交回復期には、「同種」ではないことについての理解は進んでいたが、「同文」であることについてもすでに否定されていた。日本国内である種の「中国ブーム」が起き、それに対する猛省が起きていたのである。ちょうど同じ時期、

文化庁から『中国語と対応する漢語』（文化庁 1978）が出版され、両国の学者の間で、物議を醸した。意味の似ているものをSとし、全く違うものをDとし、どちらでもないものをNとし、意味が一部重なるものをOとする分類は、「日本語教育の初中級漢字における共時的な範囲」という点や、辞書同士の第一義の範囲での比較という点が見逃され、「謂われない批難」を受けた嫌いもある。しかし語彙は、時代によるという観点が強調されていなかったために、古い時代の語彙と現代のそれによって批判されたり、批判者たちが恣意的に比較する、二義の意味同士の比較によって、その杜撰さが指摘されたりもしたのである。

『中国語と対応する漢語』より少し前の時期に、大河内康憲氏が『『是』のモダリティ』（大阪外国語大学「紀要」Vol. 33 1975）という論文を発表した。「是」を単なる「繫辞＝コピュラ」として、前置の名詞と後置の名詞を繋ぐだけのものとして扱うのではなくて、副助詞「は」に擬し（「は」が文末まで係るという意味で）、モダリティを持った品詞として扱ったところに強烈な新しさがあつた。また、杉村博文『『だ』『のだ』と『是』『是～的～』』（大阪外国語大学「紀要」Vol. 49 1980）も中国語の「是」「だ」の類似点と相違点を論じたものである。似ている漢字熟語の異同の分別というだけでなく、同じ機能を持った語同士を比較対照する時期が準備されたのである。夫々の対象言語への提言を行う段階に至ったといつてよいであろう。

日本人側からは、佐治圭三氏による「存現文」の提唱（『大阪外国語大学学報』Vol. 29 1972）は、中国語の「主語述語論争」の決着に一つのヒントを与えることになったと言えるであろう。かつて、中国語では、文頭に来るものを全て主語とする考えが行われてきた。しかし、現在では、「下雨了。」の説明に主語である「天」などが省かれたものという珍説は見られなくなっている。「動詞」+「名詞」という形で、自然現象・動作の出現を表す表現として理解されるようになっており、日本人中国語学習者への指導には、「は」と「が」の使い分けが用いられることさえある。

一方、中国人側からは、楊凱榮氏『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』（くろしお出版 1989）における「使役文」の分析は、日中両語の使役構文の再確認に強い影響力を持った。楊氏同書に書かれた寺村秀夫氏の「序」は、それ自体、日中対照研究の研究目的の一つとなっている。すなわち、

日中語の使役表現の、比較的典型的に対応する部分を手がかりとして、それぞれがそれぞれの言語の構文的、表現的体系の中でどういう位置を占めているかというところまで視野を切り拓いていっているところにある、……………。

と。また、張威氏『結果可能表現の研究』（くろしお出版 1998）による、日本語における「結果可能表現」の発見が行われた。「結果可能表現」とは、著者の言によれば、

中国語話者の日本語習得に見られる問題点の分析からスタートし、中日語対照研究の方法論に基づき、中国語の可能補語よりヒントを得て、日本語の動的述語表現（主として有対自動詞表現）が無標識の形で可能の意味を表す現象、……………。

ということになる。本書の「序」で、

昨今、日中対照研究と称する論文や論集を目にすることが多くなってきているが、その内容は依然として中国語と日本語の特定の言語現象についての単なる比較にすぎないものがほとんどである現状に鑑み、日中対照研究の一つのモデルとして本書が世に

出ることの意義は大きい。

と書いて、張威氏の「結果可能補語」に対する高く評価している。

また、王学群『現代日本語における否定文の研究——中国語との対照比較を視野にいれて——』（2003 株式会社日本僑報社）も日中対照研究を基礎として、「否定」を扱っている。王氏の場合、日本語の「否定」を論ずる際、中国語の用例によって確認をしていた（以上の三著はいずれも博士論文である）。対照研究には、こういう活用のしかたもある。かかる発見・確認は、優劣を問わないとすれば、それこそ研究者の数ほどあり、枚挙に暇がないほどであるし、誤用研究に至っては、各発表者ごとにあるわけで、これまた数限りない。

以上のように見渡してみる時、我々は日中両語を比べて論じるだけの、そして、単なる対照研究に止まらない、比較言語学の側に深く踏み込んだ研究分野が登場する機運を感じることが出来るであろう。ただ、平井勝利「“日中対照研究”について昨今思うこと」（「トンシュエ」Vol. 7 1994 同学社）の批判を常に謙虚に聞いておく必要がある。書かれたのは、今から10年前のエッセイであるが、なお新しい提言である。すなわち、

……少なくとも、現在の日本語と中国語の対照研究の世界に限ってのことであるが、その水準から言って言語学の一分野としての名を冠するのは時期早尚である。方法論としてすら充分にこなせないでいるばかりか、中には、単に日本語と中国語の言語現象を対比して事足りりとしているものさえ多数見かける。方法論としての対照研究は今さら言うまでもないことだが、例えば、中国語のある言語現象を究明しようとする場合、日本語における同類の言語現象をつぶさに観察し、先行研究によって示された体系や法則性をみていくなかで、然るべきヒントを得て、中国語プロパーの世界からでは考えられないような視点や角度から分析を進めていくことである。

と言う。

R. J. デイ ピエトロは、文化の対照については、

文化体系を対照することはしなかった。そのような仕事は、手をつければ、本を1冊書かなければ意味はないだろう。

と言う（小池生夫訳 大修館書店 1974）ように、範囲を言語に止め、文化の分野に立ち入ることを止めているわけである。言うまでもなく、日中両国語は、系統を異にする言語である。しかし、両国の千数百年來の文化的交流を通じて、共時的なものだけではなく、通時的な研究に耐え得る分野も少なくない。

例えば、私がこの数年来、興味を持っている分野が「漢文訓読語」の研究である。これについて、若干のコメントをしてみたい。漢文訓読語は、ある時は、「訓点語」とも名を変え、またある時には、「和漢混交文」とも、「候文」とも名乗り、ある時は、「普通文」と称せられた時もある。いずれも、中国の原文を如何にして日本語の語順に合わせて読んでいくか、また、それが現代日本語の文章語にどのような形で残っているのか。こういう点に興味を感じたわけである。予ねて私は、「徳富蘆花『自然と人生』——美文としての漢文訓読調（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』Vol. 44 第三分冊）、「現代日本語に伏流する漢文脈」——中島敦『山月記』——（早稲田大学日本語研究教育センター「紀要」Vol. 17）という論文を書き、日本人にとっての美文とはどのようなものであるのか、少し古臭くはあるが、現代語として意識されている文体の中に存在する訓読語を語彙・語法の

両面から、検討したことがある。前者においては、五言・七言からなる漢詩の訓読調を基調とした字数の文が美文としての条件となること、後者では、字数が多いからと言って、必ずしも漢文訓読系のもではなく、欧米文の翻訳文体系のものとは限らないこと、一文における漢字の出現率が30%から40%のものが、原典の訓読文体にはほぼ一致すること、等々を指摘しておいた。また、現在執筆中の論文では、以下の六点を満たしているものを漢文訓読文体の残存する文体と呼びたいと提案しておいた。

1. 独特な漢文訓読語 = 漢文訓読特有語が用いられていること
例. いまだ～ず まさに～せんとす等 (再読文字)
 2. 時制や敬語の助動詞・補助動詞の使用が少ないこと
= 漢文独特の時制詞や敬意を表す名詞語彙が用いられていること
例. かつて すでに 上 帝
 3. 漢字の使用率が他の文より多いこと
漢字使用率 = 漢字数 ÷ 総字数 (句読点・記号も含む)
 4. 中国語独特の固有名詞 (人名・地名・官職名等) が用いられていること
例. 李徴・隴西・標騎將軍等
 5. その典拠となった作品が存在するもの
 6. 文章の長さが一定以上 (20 字程度以上) であること
- 1)、2) については、山田孝雄・築島裕・白藤礼幸氏の研究があるとおりである。3) が私の提案するものである。漢文訓読の癖として、原点に記載されているものはなるべくそのまま読むことが多いからである。4)、5)、6) については、あくまで参考である。これらは、完全なものではない。今後は、もっと精度の高いものを作りたいと思っている。

そもそも、言語の対照研究は、教育の一環であり、学習者の誤用の分析がその主な任務であったが、文化や歴史の分野までがその範囲に入る。確かに、ディエ・ピエトロの先の指摘にもあるように、対照研究の範囲を文化・文学に拡大することは、実に至難な過程である。しかし、こと、日中両語の対照研究の場合は、比較言語学の通時的手法に応用しようとするれば、それが出来る稀有な存在であり、なおかつ、そうした可能性を秘めたものではないであろうか。

最近では、日本の古典文学を正式な教育課程に取り入れる教育機関も多いと聞いている。こうした機運の下で、現代日本語研究の分野の中に、古典研究、特に漢文訓読語の研究が組み入れられるよう切望したい。

以上、7、80年代以降の日本における日中対照研究のあらましを述べ、将来の可能性の一端を述べた。これを機に日中両語の対照研究の範囲が広がることを希望して已まない。

(完)

本稿は、2004年10月21日、北京大学で開催された『『2004 日本語文化研究と教育』シンポジウム 第3部「言語一般」』での発表草稿に加筆したものである。